

◇神武（磐余彦）と神功／海部氏系図

記紀に登場する磐余彦は、夏王朝の開祖・啓のごとく、神代と袂を分かつて新王朝をきり開く
スメラミコト はつくにしらすの

天皇（始馭天下之天皇）であり、その建国時期は前六六〇年とされる。また、神功は仲哀皇后として四世紀中頃に活躍する一方、三世紀前半から中頃の倭女王ヒミコやトヨに見立てられた。

本書での磐余彦は、神国・常世づくりに突っ走った邪馬台国を三世紀末に打倒して、三〇一年元旦に大和朝廷を開き、初代天皇に立つとしている。神功は三世紀後半に邪馬台国の四代目女王に立ち、ついで仲哀（本書では邪馬台国の天皇）の皇后となるが、その後は仲哀を見限って磐余彦の妃に転じ、夫婦共に大和朝廷を築いたとする。

その結果、磐余彦の生存時期に関して、九百年以上もの隔たりができた。神功のそれも、百数十年の年代差が出る。どちらが、真実なのか。それは、これから提示する資料や本書の筋書からしかと判定できるはずだ。この件に関して、記紀系譜と異なる八幡（神功皇子、応神）にまつわる伝承や、丹後籠神社所蔵の海部氏系図があるので紹介しておこう。

一般的に、八幡信仰は宇佐神宮（大分県宇佐市）が最古とされるが、磐余彦が祖父の火火出見を祀り始めたとする鹿兒島神宮も、「当宮の石体宮こそ、八幡信仰の発祥地だ」と主張して一步も譲らない。その石体宮は、磐余彦が東征計画を練った所とされ、彼にちなむ巨石を御神体として祀る。一方、お産の神様としても有名だ。それは、神功が石体宮で応神を産んだからとされる。これと同じ結論に至る伝承は、やたらとある。これを追うことによって、「応神の実の父は、誰か」という謎にも迫ってみたい。

『水鏡』も『今昔物語集』も、一一三二年の大宰府文書も、神功がここで八幡を産むことや、石体宮の巨石に八幡の文字が刻まれていた由を伝える。

阿蘇神社（熊本県阿蘇市）の縁起も、こう伝える。

「神武天皇（磐余彦）の長男は、阿蘇草部の娘と結婚して阿蘇権現となるが、三男の方は兄の勧めで都に出て神功に宿り、八幡としてこの世に生まれた」

要するに、神功が出産した八幡は磐余彦の兄と言うに等しい。これを隠すためか、神武と神功の間の系譜は十数代引き離されたり、海部氏系図の武振熊が十七世孫と記されたりもした。

古代の尾張や丹後を治めたのは、火明を祖とする海部氏だ。その本家筋の尾張家は、熱田神宮を司祭して草薙剣を奉じてきた。丹後海部家も籠神社の宮司を世襲し、彦火明命・天照大神・豊受大神を祀ってきた。同時に、彦火明に始まる日本最古の海部氏系図を伝えてきて、外宮の元伊勢とも主張する。外宮の由来書も、伊勢大神が籠神社から勧請された由を伝える。

伊勢神宮の祭祀においても、籠神社は古代丹後地方で月次祭・新嘗祭の奉幣に預かるただ一つの神社であったし、籠神社の高欄上にある五色の座玉（黄青白赤黒Ⅱ大地と東西南北、黄帝と四方の天帝）は伊勢神宮とここだけにしかない。これだけでも、籠神社の格式の高さや海部氏系図（本系図と勘注系図）の重要さがわかるというものだ。

①【本系図】 始祖彦火明——〇——〇——三世孫倭宿禰——（十七世孫）武振熊

②【勘注系図】 始祖彦火明——兒天香語山——孫天村雲——天忍人（亦名倭宿禰）——

この始祖彦火明について、『古事記』も『日本書紀』も火瓊瓊杵の兄弟と伝える。（本系図と同じ）

『古事記』、「天忍穗耳尊、万幡豊秋津姫命に）生ませる子、天火明命。次に日子火瓊瓊杵」

『日本書紀』、「天忍穗耳尊、高皇産霊の女を娶りて、妃として児を生む。天照国照彦火明命

と号す。これ尾張連等の遠祖なり。次に火瓊瓊杵尊。」

一方、『日本書紀』は、火瓊瓊杵の兒・火照（海幸彦）が火明だとする。（勘注系図と同じ）

『古事記』

火照（海幸彦、隼人阿多君祖）

火スセリ

火遠（穗穗手見）

『日本書紀』 火スセリ（海幸彦、隼人等が始祖） 火火出見（火折） 火明（尾張連の祖）
 ☆『先代旧事本紀』も尾張氏の系譜として、こう記す。

饒速日命亦名天火明命―児天香語山命―孫天村雲命―天忍人―（以下略）

『但馬故事記』、「饒速日は勅と十種の神宝を奉じて妃の天道姫・数多の隨身を率い、丹波の真名井原に天降った。そこで豊受姫からもらった五穀や桑の種を植えついたり、井戸を掘つたり、田畑を開いて蚕を育てたりした。後に、饒速日はそこから河内生駒に天降った。天道姫が丹波で産んだ児を天香語山、そのまた児を天村雲という」

☆本書では、「天孫となつて纏向入りした天火明（火天神天鹿兎山の実子）は、大己貴を従えながらヒミコの国づくりに励んでいたが、結局はヒミコに叛いて常陸に遁走した。

ヒミコは晩年、火瓊瓊杵の児・火照（海幸彦）を呼びつけて火明と饒速日を襲名させ、日本朝を開かせた。後に、彼は封禅して天神に昇り、天照国照彦火明饒速日と語った」とする。この海部氏系図は、戦前には問題視されて門外不出とされた。だが戦後になると、その価値が見直されて、国宝に指定された。これには、理由がある。この本系図と『古事記』の系譜を重ねると、記紀系譜を根底から覆すものが浮かび上がってくるからだ。ならば、海部氏系図の始祖彦火明は、どちらが正しいのか。記紀や『先代旧事本紀』なども重ねて検証してみたい。

①本系図に沿って考えた場合

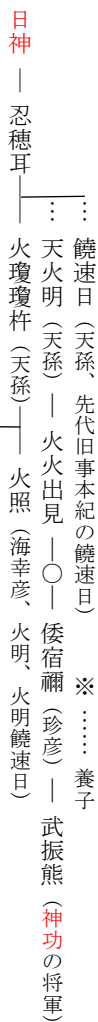
始祖彦火明Ⅱ天火明（天孫）―火火出見―〇―三世孫倭宿禰（珍彦）―武振熊

ここにいう武振熊は神功の將軍であり、ワニ族の祖とされる人物だ。竹内宿禰と共に神功に楯突いた仲哀の皇子・忍熊王を討った。倭宿禰については、以下の記事から特定できよう。

「神武紀」、「天皇、功を定め賞を行いたまう。珍彦（椎根津彦）を倭の国造とす」

【籠神社の伝承】、「海部宮司家四代目の祖・珍彦は、神武東遷の折、亀にのって現れ、大和へ先導した。建国の功労者として、倭宿禰の称号を賜った」

☆旧事紀、国造本紀、「珍彦は火火出見の孫で、神武朝に導士の功によって大倭国造となった」



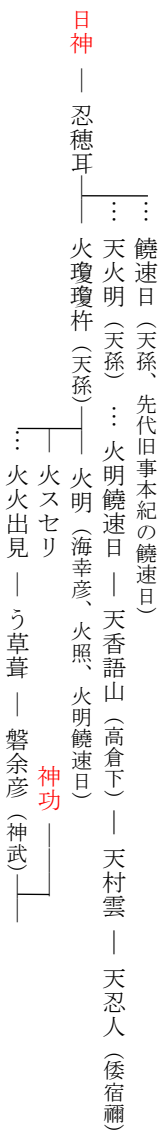
この系図では、天火明・火火出見・倭宿禰（珍彦）、磐余彦・神功の關係に不都合は生じない。
 ②勘注系図に沿って考えた場合

始祖彦火明 〓 火明饒速日 — 天香語山 — 天村雲 — 天忍人（倭宿禰） —

『先代旧事本紀』は先の系譜に加えて、天香語山が天照大神のひ孫にあたる饒速日と天道姫の間に生まれた児で、高倉下としている。

☆記紀は、熊野に上陸した磐余彦が高倉下の助太刀の下で、熊らを撃退したと伝える。

☆本書では、火瓊瓊杵の児・火照（海幸彦、『日本書紀』の一書では火明）が火明と饒速日を襲名して火明饒速日と語ったとして、天火明（天孫） — 火明饒速日に続くとする。



この系図も、相互に符合していて、矛盾するところがない。

③ 結局、本系図も勘注系図も真実を伝えており、本書の筋書とも合致している。

この二つの合成系図において、彦火明から神功將軍の武振熊までが五世、天孫火明から天香語山までが三世、火瓊瓊杵から磐余彦までが四世であることを指折り数えて頂きたい。結果は、磐余彦と神功が同じ時代に生きた事実が浮かび上がってくる。

④ 筆者は海部氏系図を参考にして、この物語を組み立てたわけではない。にもかかわらず、本書の系譜と海部氏系図とはびたりと一致した。

⑤ 筆者はこれら全てが真実を伝えていると見て、以下の筋書きと系譜を組み立てた。

一、神功は熊襲征伐の勅命が降ったことで、敦賀の氣比に長男を残したままで筑紫島に赴いた。

二、仲哀はお告げを無視して熊襲征伐に打って出たが、逆に磐余彦率いる熊襲に破れた。

三、檀日に残った神功は、仲哀を見限って東征軍を呼び入れると、磐余彦の妃に納まった。

四、仲哀の児を宿していた神功は、「新羅は、皇后の孕める児が治める国だ」との神託を檀日宮で受けた後、新羅遠征に向かった。

五、凱旋した神功は筑紫の宇美に移り、そこで次男御間城入彦（仲哀の児）を産んだ。

六、その後、神功は三男八幡（磐余彦の児）を石体宮で出産した。

